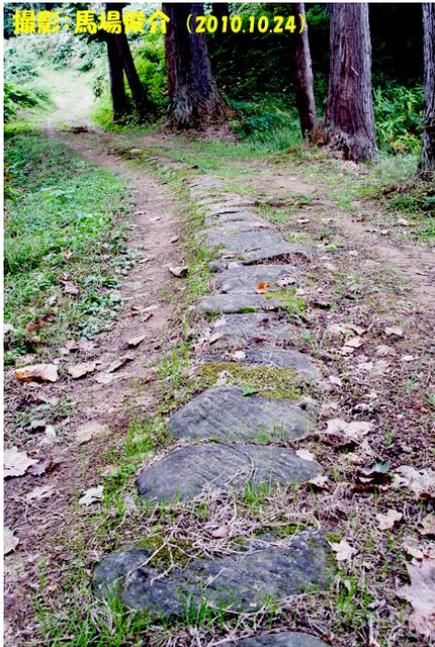


新潟県

街道 1

新潟県には、本調査で把握している限り国内唯一の「滑り止め」加工を施した石畳、安塚の敷石道（上越市、戦国期、市史跡）が **A** ある。ただ、安塚の敷石道は、道幅ほぼ一杯に石を並べた本格的な石畳



道ではなく、道の中央に一列だけ石を並べた敷石道である。敷石道は、通行量の少ない街道の峠道で時折見られる構造であるが、安塚の敷石道の特異な点は、すべての敷石の上面に2~3cm 幅の筋目

が斜めに刻み込まれ、効果的な滑り止めになっていることである。国内に数多く残る石畳の多くは、現在、苔むし、あるいは、表面が磨耗してスリッしやすいが、旅人が頻繁に利用していた江戸時代、どの程度滑りやすかったのかは分からない。ただ、有名なジールトは、『江戸参府紀行』の1826年2月20日（月・日は西暦）の項で、福岡県の冷水峠石畳（1611年竣工）を通過した際、「細く険しく滑りやすい山道をよじのぼる」と記録しているし、観光用に新たに新設した石畳でも雨の後などは結構滑り易いことから、一列で他に逃げ道のない敷石道の場合は、滑り止めの存在は有用であったと思われる。

街道 2

新潟・長野では、塩の道がとりわけ重視され、日本海から塩や海産物を、松本盆地からは麻や煙草などが牛や馬に載せて運ばれた。千国街道（糸魚川～大町～松本）は、その代表的存在である。そ



の千国街道にある大野のウトウ（糸魚川市、江戸期、国史跡）**B**は、U字型の切通しで、牛馬の通行を用意するために造られたと言われる。また、千国街道と北陸道の交差部に建てられた新鉄の牛つなぎ石（糸魚川市、安永5（1776））**B**は、牛方衆がこの石に牛をつなぎ、塩を肴に酒を飲んだと伝えられる。両者ともに、塩の道の歴史をよく伝えている。

街道 3

新潟と福島を結ぶ会津街道には、栄山の一り石（阿賀町、享和元（1801）、町有形）**B**が残っている。音無川沿いの街道が狭いため、土塚に代えて石標を建てたもので、「一り石」と刻字され、一里塚同様2基設置された。松山藩のように「松山札辻」からの里程を示した標石を一里塚の代わりとした特殊例もあるが、地形の関係で塚の代理に石標を用いた例は珍しい（旧道にあったものを2個並べて移設）。



農業 1

新潟と千葉の2県にしか見られない農業遺産に、水田造成用の瀬替えがある。何れも極度に蛇行した河道のある地形が生んだもので、蛇行部をショート

撮影:寺村 淳



カットすることで廃川となった土地を水田として利用した。新潟県内でも、特に、渋海川流域には近世から近代にかけて47ヶ所もの瀬替えが行われ、中でも、江戸初期の室島の瀬替え、岩瀬の瀬替え

(十日町市) **A**、江戸中期の横沢～千谷沢の瀬替え(長岡市、享保年間(1716-35)) **A**は大規模である。それらの瀬替えの中で最も“見栄え”のするのが、ショートカット部をトンネルにしたもので、代表例に東川の河川隧道(十日町市、慶応年間(1865-68)) **A**がある。千葉と比べると新潟の方が谷が深いためトンネルの規模も大きく印象的だが、山間部のためせっかく先人が創り出した水田が耕作放棄地になってしまっているのは残念である。

農業 2

八海神社の参道となっている八海山杉並木(南魚沼市、天保7(1836)、県天然) **A**は、江戸時代として



撮影:馬場俊介(2010.10.24)

では珍しい水源涵養林である。天保7に一带が大旱魃に襲われた時の経験を踏まえ、水源を担保する目的で植林されたものである。長さ440mにわたり、256本の杉が残っている。

漁業 1

河川や湖の水面の一部を領主専用の漁場としたものが御留川の定義であるが、種川(村上市、享保12(1728)) **A**は、悪い意味での独占的な囲い込みではなく、鮭の保護増殖を目的とするものであった。発案者は村上藩士・青砥武平治で、鮭に母川回帰性のあることに着目し、三面川に分流を設けて鮭の産卵、孵化しやすい河床を作り、稚魚の時期に漁を禁じることで鮭を増殖させる「種川の制」を施行した。これにより鮭の漁獲量は3～4倍に増え、他藩でも真似るところ(庄内藩)が現れた。世界初の鮭の自然保護増殖と高く評価される試みである。



提供:村上市教育委員会

鉱業 1

新潟県には、全国屈指の鉱業遺産が二つある。第一が金、第二が石油である。佐渡金山は、慶長6(1601)に北山で金脈が発見されて以来、江戸幕府にとって最重要の財源となった当時世界最大級の金山である。そのシンボルとも言える存在が、道遊の割戸(佐渡市、慶長6(1601)、国史跡) **A**である。慶長6の金脈発見に伴い掘り進められた露天掘りの跡で、一つの山が幅30m、深さ74mにわたってV字型に断ち

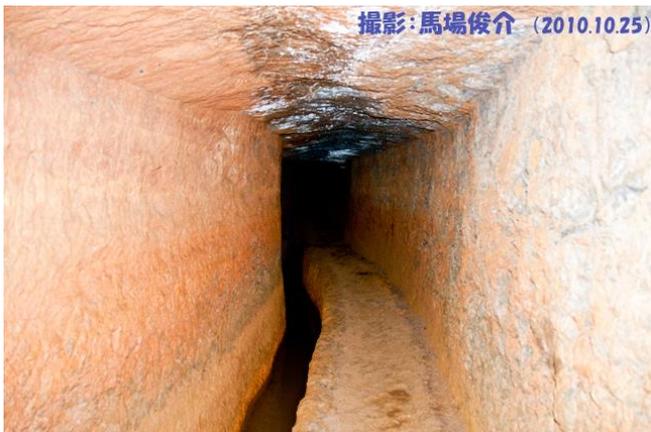
提供:(株)ゴールデン佐渡



切られたようになっている。

佐渡金山の観光面での中心は宗太夫坑（佐渡市、元禄初頭（1690代）、国史跡）**A**で、江戸初期の割間歩を利用し、当時の坑道内部での作業の様子を多数の人形展示で分かりやすく解説している。

佐渡金山で最も見事な遺構は、南沢疎水道（佐渡市、元禄9（1696）、国史跡）**A**である。割間歩の湧水が問題となったため、佐渡奉行・萩原重秀の命で6年がかりで掘られた排水用のトンネルである。全長は約1.1キロ、幅1.8m、高さ2.4mの“将棋の駒型”をした断面の素掘トンネルだが、表面が丁寧に仕上げられているため、江戸期の農業用水でよく見かける素掘トンネルとは様相が全く異なっている。内部は、立ち入りが制限されているため保存状態良好で、振矩師・静野与右衛門の高い測量技術を垣間見ることができる。



新潟県には、佐渡金山が発見される前、戦国から江戸初期にかけて全国の産金量の3分の1を産出したと言われる鳴海金山があり、大切坑（村上市、16世紀末～元和2（1616））**A**が入坑可能で最大規模の坑道として残る。

鉱業 2

金山と違い、新潟県でしか見られないものが油田である。県内に、近世以前に由来する遺構は3ヶ所あるが、最も大規模なものが、日本最古の石油採掘地とされる黒川の臭水油坪（胎内市、天智天皇7（668）以前?、国史跡）**A**である。『日本書紀』の天智7の項に「越の国、燃土、燃水を献る」との記載があり、これが黒川を指すのではないかというのが最も有力な説である。



なお、『日本書紀』に記載は黒川ではなく、妙法寺の草生水献上場（柏崎市、市史跡）**B**を指しているという説もある（現存する規模は小さい）。

3番目の油田である草水の煮坪（新潟市秋葉区、慶長13（1608）、市史跡）**A**は、真柄家の祖となる仁兵衛が新発田藩の命を受け、荒地の開墾にあっていた際に発見したもので、全盛時には水と石油と大量のガスが混じり合って1m余りも噴き上げていたとされる。

防災 1

農業の項で扱った瀬替えを、治水に用いた代表例が天野の瀬替え（新潟市江南区、延宝7（1679）頃）**A**である。現在の新潟市天野付近で信濃川がW字型に湾曲し氾濫をくり返していたため、新発田藩が主導し農民も全面的に協力しS字型に川を付け替えた。ただ、旧河道をそのまま残したため洪水時に新旧両河道を水が流れる状態となり、それを解消するため旧河道の開口部は堤防で閉め切ろうとしたがなかなか合意が得られなかった（閉め切られたのは、瀬替えから200年近く経過した万延元（1860））。

防災 2

新潟の特徴的な遺産の最後は、安田の火除土手（阿賀野市、貞享2（1685）以降、市史跡）**B**である。この地区は「ダシの風」と呼ばれる東南東の風が強く、町並の大半を燃失する火災が度々発生したため延宝4（1676）に町割（町筋の変更）を行った。しかし、再び貞享2の大火に見舞われたため、大通りの真中に用水を引き、6ヶ所の広小路を造り、そこに延焼防止用の土塁を築いた（現存3ヶ所）。